

Special Essay

ベトナム戦争

病理学講座

矢野 博久

2009年1月、博多座ではミス・サイゴンのロングラン公演中である。1週間前私も観劇した。1975年、陥落直前のサイゴンでのベトナム人のキムとアメリカ軍兵士のクリスとの出会い、ベトナム戦争終結による離別、そして3年後の再会。戦争のもたらす悲劇と二人の愛を描いた感動的なミュージカルである。博多座では、実物大のヘリコプターなどの大掛かりな舞台装置を擁するオリジナル演出版ミス・サイゴンが上演できるように設計段階から準備していたという力の入れようである。サイゴンは、陥落1年後の1976年にベトナム民主共和国の初代大統領のホー・チ・ミンの名前をとって、ホーチミンと改称された。最近ではベトナムの魅力を感じる日本人観光客が増えているらしいが、私もその一人として昨夏ホーチミンを訪れた。空港から市内に向かうバスの窓から目にとまったのは、もの凄い数の群がるバイク。しかも、二人乗りは当たり前で、3人、4人と小さなバイクにまたがっている(写真1)。50ccバイクは免許が不要らしくそのため利用者が多いのであろうが、事故もまた多いようである。雑貨店が並ぶドンコイ通り近くのホテルを拠点に、ホー・チ・ミンの巨大な肖像画が内壁に描かれた中央郵便局、サイゴン陥落の場所である統一会堂、人民委員会庁舎、ホーチミン市博物館などの名所を訪れ、自転車の前に客用の座席をつけたシクロと呼ばれる乗り物も経験し、フォーやベトナム料理も楽しんだ。しかし、私の気分を暗くした場所が1カ所あった。それは、戦争証跡博物館である。ベトナム戦争の貴重な資料が展示してあり、生々しい犠牲者の写真、手榴弾などが中には展示してあり、屋外には戦闘機、戦車が置かれている。私は、エージェント・オレンジ、いわゆる「枯れ葉剤」の展示の前で足が止まった(写真2)。米軍は、ベトナム戦争中解放戦線の隠れ家であるジャングルを絶滅させ、解放区で作られる農作物を汚染し、食料を奪うためにこの毒薬を使用したのである。61年から10年間で約7,200万リットルの枯れ葉剤を米軍は散布し、その中に少なくとも170キロの催奇形性や発がん性を持つダイオキシンが含まれていたとのことである。日本でもダイオキシン発生が一時期かなり注目・危惧されたが、量が全く違う。現在も全土で100万人以上の人に影響が残り、戦後生まれた子供の15万人以上に重篤な疾患をもたらしているとの報告もある。そのような、奇形をもった子供の写真が多数展示してあった。枯れ葉剤の被害者に対する補償問題は未解決であり、また、アメリカ軍兵士とベトナム人女性の間生まれ戦後残された私生児も大きな社会問題であろう。ベトナムを訪れ、ベトナムは今、苦難の時を乗り越え、少しずつ成長していると感じた。久留米大学附属図書館のホームページで「ベトナム戦争」というキーワードを入力し蔵書検索すると46件ヒットした。そのうち、枯葉剤に関連したものは「戦場の枯葉剤：ベトナム・アメリカ・韓国」中村梧郎著、岩波書店の1冊で医学図書館に所蔵してある。

※次ページ写真掲載有り

写真1



写真2

